

## 博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	川崎 佳哉
論文題目	オーソン・ウェルズとメディアの実験
審査要旨	
<p>本論文は、20 世紀にラジオ、映画、テレビといった様々なメディアを横断して、監督や俳優として多彩な活動を続けたオーソン・ウェルズの諸作品を取り上げて、それを「メディア」という新しい視点から論じ直すことを企図したものである。先行研究では、ウェルズは『市民ケーン』に代表される、ハリウッド映画の古典的スタイルから逸脱した作品を作り続けたモダニズム的映画作家と捉えられてきた。しかし本論では彼を、ラジオから映画、映画からテレビへと活動の場を移行させながら、それぞれのメディアが、マス・コミュニケーションとしての社会的機能とは異なった形で、個々の観客に対して親密な語りかけを行う道具になり得るかどうかを探求した「メディアの実験者」として捉え直そうとする。論文は3部構成で、全6章、及び序論、結論、引用文献リストからなる。</p> <p>第1章「『一人称単数』という語りの実験—ラジオ・ドラマと『宇宙戦争』」では、ウェルズが映画界に入る以前の1930年代のラジオ・ドラマにおける活躍を取り上げ、とりわけ臨時ニュースの形式を借りて火星人の来襲をドラマとして描いたためにパニックを引き起こしたと言われる『宇宙戦争』を捉え直している。この作品が鮮烈な効果を上げたのは、実は当時のニュース報道におけるカルテンボーンら著名アナウンサーたちの語りかけが親密な語りかけとしてリスナーに受容されていたからである。つまり『宇宙戦争』は、一人称的な語りかけのメディアとしてのラジオに対する実験だったことが明らかにされる。</p> <p>第2章「一人称カメラという実験—『闇の奥』から『市民ケーン』へ」では、ウェルズが映画監督第一作として著名な『市民ケーン』を、先行研究のように、ドイツ表現主義やソビエト・モンタージュを総合したモダニズム作品として捉えるのではなく、その直前に計画され未完に終わったコンラッド『闇の奥』の映画化作品との関係で論じ直したものである。ウェルズは『闇の奥』のカメラを、主人公マーロウの一人称的な視点に立たせて撮るという実験として製作しようとした。この計画の失敗後に作られた『市民ケーン』もまた、スクリーンの平面性を否定し、観客にスクリーンのない世界を彷徨っているかのような経験をさせようとした、独特の実験だったと論じられる。</p> <p>第3章「ラジオ、紙芝居、朗読映画」では、『市民ケーン』以降の『偉大なるアンバーソン家の人々』や『上海から来た女』といった映画作品が、ウェルズがラジオ・ドラマの経験を生かして「視覚的イメージを持つラジオ」として実験的に製作したものだったことを明らかにしている。これらの作品だけでなく、『アーカディン氏』や『審判』といった作品においても、ウェルズはポスト・シンクの手法を使って、撮影後の映像に登場人物の台詞を入れ直したり、ときに自分自身の声を当てたりする音声重視の試みを繰り返していた。そのように考えれば、ウェルズはこれらの作品において、紙芝居のようなイメージを自らの語りかけを通して見せる「朗読映画」を目指していたのだと論じられる。</p> <p>第4章「イメージを聞く—シェイクスピア映画と新たな詩」は、ウェルズがラジオ以前に、演劇活動を行ってきたときから多大な影響を受けていたシェイクスピア作品を映画化することに、いかに繰り返し挑戦していたかに着目し、そこに自分の朗読を聞かせる映画というウェルズ独特の実験を読み込んでいく。そうした演劇映画としての『マクベス』、『オセロ』、『フォルスタッフ』といった作品に関しては、これまで先行研究では、イメージと音声の不調和が指摘されてきた。しかし、それはモダニズム的な不調和を狙っていたというよりも、演劇作品を映画化するというメディア的な実験によって引き起こされたものだったと著者は論じる。</p> <p>第5章「小さなスクリーンの芸術—テレビ作品とエッセイ映画」では、これまで過小評価されてきた彼のテレビ作品を、メディアにおける親密な語りの可能性を実験した、朗読映画などの試みと同列にあるものとして捉え直すべきだと主張している。例えばテレビ・ドラマ『若さの泉』は、ウェルズが静止画を中心としたイメージを、紙芝居のように使って自らが物語を語っていくような不思議な作品になっている。その試みは、後年の贋作家をめぐる不思議なエッセイ映画『フェイク』にも繋がっているのであり、それはまさにイメージをウェルズの語りの一</p>	

氏名 川崎佳哉

部に組み込んでしまうような実験になっていたことが論じられる。

第6章「カメラとのコミュニケーション」においては、ウェルズが語り手として観客にパーソナルに語りかける試みが、同時代のブレヒト演劇における「注釈者」という考え方とはいかに違っていたかが論じられている。ブレヒトの「注釈者」が、観客を「異化効果」によって批判的思考へと導くことを目指していたとするならば、ウェルズは「言葉と光のマジック」という詐術によって、観客を虚構の世界へと引きずり込むことを目指していた。そのときウェルズはカメラに向かって、観客たちに親密に語りかけるような戦略を取った。それこそが社会的なマス・コミュニケーション機能に対して、メディアのパーソナル性という異なった可能性を探求するウェルズの実験だったのだと著者は主張する。

こうして本論文は、これまで先行研究で過小評価されてきたウェルズのテレビ作品、エッセイ映画、シェイクスピア映画などが、『市民ケーン』などの代表的映画作品と同様に、彼の一贯した「メディアの実験者」としての探求だったことを明らかにしたものになっている。

公開審査会においては、こうしたウェルズの多様かつ膨大な作品群を「メディアの実験者」という一つのパースペクティブから捉えた本論文は、比類なき研究として高く評価された。しかし同時に、本論文で使用されている「モダニズム映画」や「エッセイ映画」などの定義が曖昧であること、『黒い罌』などの傑作映画を取り扱うことができていないこと、『闇の奥』の語りの複雑さを把握しきれていないこと、メディア史的な視点が弱かったこと、さらに俳優ウェルズをめぐる議論が弱かったことなどが議論された。しかし本論文が、今後のオーソン・ウェルズやメディアをめぐる研究を切り開いていくための視点を切り開いた、画期的な研究として優れたものであることもまた繰り返し確認された。

よって、以上のような審査を踏まえつつ、審査委員会は全員一致で、本論文を博士学位の授与にふさわしい論文であると判定した。

公開審査会開催日	2020年 1月 25日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	長谷 正人	映像文化論・文化社会学	
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	岡室 美奈子	現代演劇論、テレビ論	博士(国立アイルランド大学ダブリン校)
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	藤井 仁子	映画史、映画理論	
審査委員	信州大学学術研究院人文科学系・准教授	飯岡 詩朗	映画研究	
審査委員				